上記の点に加えて、使用されている用語が既存の会計と同様の意味・用法で用いられているか否かを、用語を目にするたびに考え、判断しなければならないという問題が生じるということである。

上記の諸点を踏まえ、筆者は投入面における貨幣数値化可能な情報の中の、環境投資という用語に、特に関心を持った。本来であれば、投資という用語は、長期にわたって継続的に実施される経営活動上のプロジェクトに対して投入される金銭等の支出を意味する。そして、プロジェクトの期間を通じて回収されることが前提とされる。しかし、この投資という用語が環境会計で用いられた場合、投入に対する回収という関係を成立させているとは限らない。そして、必ずしも期間概念を考慮して用いられているとも限らない。この点に、筆者は特に強い関心を抱いたのである。そして現実に、環境投資という単語は、その意味、用法等が今なお明確化されていない。

そこで筆者は、これまでに提唱・実施されてきた環境会計技法における環境投資概念を概観し、その多様性と曖昧さ、事例等を提示する。その上で、筆者が考える適切な環境投資の定義を挙げる。そして、当該環境投資概念を積極的に用いた環境会計技法を提示し、その有用性の考察を試みるものである。

# 「環境保全と愛知万博に関する一考察」

柳田　仁

## はじめに

イベントと環境問題、資金問題は、何時もついて廻る問題である。本稿では、特に愛知万博と環境保全の問題に焦点を絞って考察する。

曲折を経て開催決定に漕ぎつけた愛知万博も、2003年9月24日現在、公式参加表明した国・国際機関126(118カ国と8機関)となり、目標としていた100を超えた。また、開幕まで1年半前の9月25日には第1期分の前売り入場券の販売開始をするところまで進展した。街角では、「愛知万博を成功させよう」「愛・地球博」「愛知万博まで××日」等という横断幕や電光板も見慣れたものとなり、更に開催準備に拍車がかかっている。

本稿は、表題についての概要をまとめた中間報告である。ただ、本年度は、万博開催現地に出張して、主催者、出展企業等のヒアリング、情報収集をまだ実施して

ないので、現在までに収集した情報のみでまとめた。

## 1．愛知万博のテーマ

愛知万博のテーマは「自然の叡智」であり、そのサブテーマはA.宇宙、生命と情報　B.人生の“わざ”と智恵　C.循環型社会と最初とは少し変わったものの、地球規模での環境問題にどう取り組み、経済・最新技術と調和させ、21世紀型万博を創造できるか否かにその成否がかかっている。例えば、万博会場の整備・運営のすべての領域で、リデュース、リュース、リサイクルの３Rを徹底するという。

## 2．愛知万博準備の経緯

万博の準備は加速度を増しているが、最近の経緯に関して主なものを以下に挙げる。

| | | |
|---|---|---|
| 1994年 | ６月 | 第115回BIE総会で21世紀型国際万博の開催決議採択 |
| 1997年 | ６月 | 第121回BIE総会(モナコ開催)で日本が2005年の国際博覧会開催権を獲得 |
| 2000年 | ６月 | EXPO2000　Hannoverが、「新しい世界の創造―人間・自然・技術―」という総合テーマのもとに開催 |
| | 12月 | 環境アセスメントに基づいた世界初の国際博覧会の正式登録 |
| 2001年 | 12月 | 愛知万博基本計画発表 |
| 2002年 | 10月 | 愛知青少年公園（長久手町）で起工式 |
| 2003年 | ９月 | 前売り入場券（第１期分）の販売開始 |
| | 10月 | パビリオン建設に着手 |
| | 同月 | EXPO参加催事企画募集 |
| | 12月 | 万博財務委員会　新委員長就任 |

## 3．万博出展企業

今回の万博では、国家・地域の他に、企業・自立した市民NPO/NGO、ボランティア等の参加を呼びかけているが、以下ではこのうち企業に焦点を当てる。

1970年の大阪万博のような規模の企業出展は、経済規模、社会情勢によって望むことはできないが、募集枠は漸く埋まったようである。出展企業はグループ別に下記のようであるが、それらの企業は、どのような目標をもって参加に踏み切ったのか探りたい。

電気事業会
JR東海
日本自動車工業会
三菱グループ
トヨタグループ
日立グループ
三井グループ
中日新聞
日本ガス協会

## 4．万博開催における諸問題

愛知万博開催も見えてきたが、まだ開催までには解決すべき種々の問題がある。例えば、

1）環境保全の具体的な内容
2）参加企業等の資金・費用とその効果
3）その他

があるが、それらの問題に関して個々に検討したい。